

[第52回]



五洋建設

五洋建設株式会社

代表取締役社長 兼 執行役員社長 **清水 琢三 氏**

サステナビリティ経営で未来をつくる ～進取の精神で挑戦を続ける～

五洋建設株式会社様は、1896年(明治29年)に広島県呉市で「水野組」として創業し、港湾土木事業を主力に「水の土木の水野組」として発展を遂げてこられ、今年で129周年となります。第2次世界大戦後は「0からのスタート」となりましたが、同社のDNAである「進取の精神」のもと、1961年の「スエズ運河改修工事の国際入札成功」を嚆矢として、シンガポールにおける埋立工事など海外事業に積極的に取り組みました。1968年には酒井建設工業株式会社(当時)を吸収合併して陸上土木部門の充実に努めるとともに、1970年代からは建築部門の強化にも取り組み、現在は国内土木、国内建築、国際の三部門がバランスよく利益貢献する会社となっております。

五洋建設株式会社様は、サステナビリティ経営を実践する「真のグローバル・ゼネラルコントラクター」を目指し、部門間の連携の強化や多様な人材の活躍のため、協力会社や取引先を含めたサプライチェーン全体での取り組みを進めておられます。五洋建設株式会社様にとって「良質な社会インフラ・建築物の建設こそが最大の社会貢献」であり、技術に裏打ちされた確かな安全と品質の提供はもちろんのこと、ESG(環境・社会・企業統治)の観点からあらゆるサステナビリティの課題に真摯に取り組むことで、臨海部と海外に強みを持つ「真のグローバル・ゼネラルコントラクター」として社会の持続的発展に貢献していく、とされる清水琢三様に、「進取の精神で挑戦を続ける」五洋建設の経営戦略についてお話を伺いました。

「水の土木の水野組」から 「国内土木、国内建築、 国際の五洋建設」へ

— 実は御社の統合報告書を読むまでは、御社のことを「海上土木に関する卓越した技術を持つ会社」としか考えておりませんでした。ところが、御社のこれまでの実績を見ると、東京国際空港(羽田空港)D滑走路工事など臨海部の土木工事だけでなく、大阪のヨドバシ梅田タワー、シンガポールのエスプラネード・シアターズ・オン・ザ・ベイなど、国内外の建築工事にも数多くの実績があることが分かりました。そこでまず、ここに至るまでの御社の歴史について、簡単にご説明いただけますでしょうか。

清水 当社は1896年に、広島県呉市で4代目水野甚次郎氏によって、「水野組」として創業しました。呉市に海軍工廠ができるということで設立されました。



水野組は、海軍の要請に応じて海軍基地のあるところに進出し、幅広く仕事を手がけました。例えば、対馬では創業間もない1900年頃、日露戦争におけるバルチック艦隊との戦いに備えて、海軍基地のあった西側の浅茅湾と佐世保鎮守府の所要時間を短縮するために、地峡を開削して万関瀬戸という航路を建設する工事に参画しました。呉では、戦艦大和建造のためのドックもつくりました。

第2次世界大戦後、海軍がなくなり、当社も「0からのスタート」で大変苦労したようですが、その時（1947年）に、我が社の代表社員に迎えたのが永野俊雄氏です。同氏は、新日本製鐵会長・経済同友会代表幹事・日本商工会議所会頭などを歴任した永野重雄氏の弟です。永野俊雄氏は、1954年から1970年まで当社の社長に在任し、その後会長となりました。

当時の特筆すべき出来事としては、第1に、スエズ運河改修工事の国際競争入札の受注があります。戦後、臨海部の土地造成、埋立、浚渫といった工事を行っていた中、「スエズ運河の改修工事の国際入札が行われるので、参加してみないか」という話が日本政府からありました。そこで、当社は入札に参加することを決意し、入札の1年前に「スエズ号」という当時アジア第一、世界でも最大級のポンプ式浚渫船スエズ号の建造に着手したのです。入札前の建造ですので、思い切った決断だったと思います。幸い受注に成功し、海外事業の先駆けとなりました。

後続工事の入札が1967年に行われた際には第3次中東戦争が始まってしまい、

入札書類を直接届けたのは当社だけという状況で、見事1番札となりました。第四次中東戦争終了後の1974年、その1番札のおかげでスエズ運河拡幅増進工事を受注しました。当時、浚渫船の稼働率が悪く厳しい経営状況だったのですが、何とかこれも乗り切ることができました。

第2は、シンガポールへの進出です。シンガポールでは、産業の柱の一つとして造船所の建設が計画され、当社は同国建国の1年前の1964年、同国で初の造船所となるジュロンシップヤードのドック建設工事を受注しました。これがきっかけとなり、当社はシンガポールで様々な大型土木・建築工事に参画し、昨年シンガポール進出60周年を迎えました。例えば、シンガポールの国土面積は、独立時の淡路島程度（約600km²）から埋立工事により奄美大島に匹敵する広さ（約730km²）へと約25%増加しましたが、当社はその約40%に関与しました。元の国土の約10%の拡張に貢献したことになります。

第3は、陸上土木・建築への業容拡大です。1968年に、酒井建設工業株式会社（当時）を吸収合併することにより、海洋土木中心であった当社の事業が陸上土木に拡大しました。その際、両社の社員の心が一つにならなければいけないということで、社名変更することになり、社内公募の結果、「五洋建設株式会社」になりました。

——社名にはどのような意味が込められているのでしょうか。

清水 英語表記は「PENTA-OCEAN CONSTRUCTION」であり、5つの大洋、すなわち太平洋、大西洋、インド洋、南氷洋及び北氷洋です。5つの大洋を越えて、海外に雄飛するという壮大な社名です。

シンガポールでの経験を日本国内で生かす

——御社が、海上土木工事の知識と経験を礎として、陸上土木、建築など多様なものづくりにより、国内外で成長してきたこと、及びスエズ運河改修工



エスプラネード・シアターズ・オン・ザ・ベイ（シンガポール）

事に象徴されるように、常に進取の精神のもと、果敢にチャレンジし続けていることが、よく分かりました。ところで、様々な事業を実施されてきた中で、過去の経験がその後のビジネスに役立ったということはあるのでしょうか。

清水 もちろんいくつもありますが、分かりやすい例として、シンガポールにおける当社の経験と実績が、日本国内で生かされている事例をいくつかお話ししましょう。

先ほど当社はシンガポールにおいて多くの埋立工事を実施してきたと申し上げましたが、当社が陸上土木や建築の実績を積んだのもシンガポールでした。当社が建築した建物としては、マリーナベイ地区にあるエスプラネード・シアターズ・オン・ザ・ベイというオペラハウスとコンサートホールの2つが入っているドリアンのような形の建物があります（2002年竣工）。これを建設したことによって、当社の建築部門がシンガポールで広く知られるようになり、シンガポール随一の繁華街オーチャード通りに、地下鉄の駅の真上に超高層ビル（ION オーチャード・ジ・オーチャード・レジデンス）の建設を手がけることに繋がりました（2010年竣工）。

シンガポールにおける60年間にわたる当社の実績は、日本国内の事業にも好影響をもたらしています。現在千葉県



ポンプ式浚渫船スエズ号のカッターヘッド（五洋建設ミュージアム）

印西市に当社が建設中のデータセンターは、シンガポールのデータセンター運営大手STテレメディア・グローバル・データセンターズ（STT GDC）が発注者ですが、シンガポールでの実績を有する当社への信頼がベースとなり、順調に工事が進んでいます。

——具体的に、どのような点が評価されているのでしょうか。

清水 まずは、当社がBIM（Building Information Modeling）の使い方に慣れているという点があると思います。シンガポールではBIMの本格導入が早く、建築確認申請から施工、納品までBIMで行うことが必須となっています。当社では、日本の建築工事に導入するに当たり、最初のころはBIM技術者を多く抱えていたシンガポールに日本語の図面を送ってBIMモデルをつくってもらっていました。最近は、シンガポールでもインドなどのBIM技術者に外注しています。また、シンガポール政府は、建設作業を行うワーカー数を極力減らしたいと考えており、当社を始め建設業では、コンクリート工のプレキャスト化など様々な手法を用いて、現場の施工生産性の向上に取り組んでいます。

——シンガポールで使われた工法の経験が、日本国内の工事に生かされている、ということはありませんか。

清水 例えば、当社が大阪梅田駅前に建設したヨドバシ梅田タワーは軟弱地盤の上に建っており、地下工事で地下水の処理が大きな課題でした。当社では、工期短縮と止水対策のため、シンガポールでの経験を生かして、「逆打ち工法」を採用しました。建物を支える杭を打設後、1階の床を先に施工して床を支保工として地下の掘削を行い、その後地下階の躯体を順次施工する工法です。地下工事は、土木技術者が止水対策を行いつつ実施するとともに、建築技術者は上層の建築工事を並行して進めました。このような土木・建築の部門間連携はシンガポールでは当たり前で、当社ならではの取り組みです。また、



ヨドバシ梅田タワー

プレキャスト工法を大胆に採用して工期を短縮している建設現場も多く、シンガポールでの経験が日本国内で様々な活用されています。

サステナビリティ経営とは

——御社の資料を読むと、「サステナビリティ経営」ということが強調されています。これについて、ご説明いただけますか。

清水 当社は、「良質な社会インフラ・建築物の建設こそが最大の社会貢献」と考えています。その上で、ESG（環境、社会、企業統治）の観点から、あらゆるサステナビリティの課題に真摯に取り組むことが必要です。サステナビリティの課題は、バラバラに取り組んでも成果は出ません。例えば、コンプライアンスだけを強調すると、「法律違反さえないければいい」といった考えを持つ社員が

出てきかねません。当社では、2023年5月に公表した中期経営計画（2023～2025年度）において、本業の成長戦略とESG重視のサステナビリティ経営を経営の両輪と位置づけ、気候変動問題への対応など8項目をマテリアリティ（重要課題）としました。

建設工事では、工場などと違って、工事場所が工事ごとに変わるので、常にサステナビリティの課題とは何かを確認し続ける必要があります。そこで、昨年9月から、建設現場において、協力会社も含めた現場の隅々まで浸透させるため、週1回「サステナビリティ朝礼」を実施しています。当社の社員が、朝礼の中で、安全、環境、人権など様々な問題について話をします。基本的な内容は本社でつくりますが、それを現場でどのように話すかについては現場で考えてもらっています。こうした積み重ねによって、サステナビリティの重要性を理解してもらおうと思っています。さらに、年1回、協力会社にアンケートを行い、価格転嫁等、持続的なサプライチェーンを構築する上で何か問題が起こっていないかといった調査も行っています。

将来に向けて ～洋上風力とZEB～

——今後、御社として注力していく分野をお教えてください。

清水 一つは、洋上風力建設事業です。2018年に完成した800トン吊りのSEP型

清水 琢三（しみず たくぞう）

1958年京都府生まれ。
1983年東京大学大学院工学系研究科修士課程修了、同年五洋建設株式会社入社。2009年執行役員・名古屋支店長、2012年常務執行役員・土木部門土木営業本部長、同年取締役兼常務執行役員・土木部門土木営業本部長、2013年取締役兼専務執行役員・土木部門土木営業本部長。2014年6月代表取締役兼執行役員社長に就任、現在に至る。





洋上風力建設

多目的起重機船に続き、2023年には1600トン吊りのSEP型多目的起重機船が稼働を開始しました。これらの船は、風車の据付作業に不可欠です。この他にも大型基礎施工船（HLV）やケーブル敷設船（CLV）等、自航式的大型作業船を建造中です。洋上風力建設工事だけでなく、海洋土木工事においても、高波浪時に安全に航行可能で船体の定点位置保持ができる自航式作業船を増やさなければならないとの思いから、多額の投資を行っています。また、洋上風力建設事業に携わる人員も、大幅に増やしています。洋上風力建設事業で1,000億円を超える事業規模を目指しており、国内土木、国内建築、国際と並ぶ第4の柱となることを期待しています。

もう一つは、ネット・ゼロ・エネルギー・ビル（ZEB）の建設です。省エネルギー化に加え、太陽光発電による再エネの供給を推進して、カーボンニュートラル実現に貢献する取り組みです。北海道の室蘭製作所新工場では事務所のZEB認証取得に加え、太陽光発電によって製造したグリーン水素を発電利用する取り組みを始めています。このような経験を踏まえて、お客様に対しても、事務所や住宅だけでなく、工場の再エネ利用を積極的にご提案していきたいと考えています。

高校時代の読書から 土木工学を目指す

——最後に、清水様ご自身のお話をお聞きしたいと思います。清水様が、五洋建設株式会社様に入社しようと思われた理由を教えてください。

清水 祖父の代まで代々大工を生業としており、私も自然と建設関係に興味を持っていました。高校時代に、『国土の変貌と水害』（高橋裕著）という岩波新書を読み、建築ではなく土木を学ぼう、と考え、大学院では海岸工学を研究しました。この経験が実務に生かせる会社が五洋建設株式会社だと考え、入社を決意しました。

——入社された後はいかがでしたか。

清水 新入社員の時から、一人前の専門家として扱ってもらい、さらには全国の支店、現場の方々と一緒に働く機会を得て、大変充実した日々を過ごしました。40代は、経営立て直しのため経営企画の仕事に没頭することになりました。大変なことも多くありました

が、この経験が現在に生きている、と感じています。

——本日は、お忙しい中、大変ありがとうございました。



インタビュー後記

今回のインタビューは、「書きたいことがたくさんあるのに字数が足りない」と悩むものでした。例えば、五洋建設株式会社様は、栃木県那須塩原市に技術研究所をお持ちで、最近この一部を「五洋建設ミュージアム」として一般に公開している、といった話など、インタビュー記事の中では省かざるを得ない話も数多くありました。

私にとって最も印象的だったのは、五洋建設株式会社様が、創業以来、常に進取の精神のもとに、積極的な先行投資を行ってきていることです。こうした会社が将来の日本を支えていくのだろうな、と感じた次第です。

聞き手：当協会専務理事
前野 陽一



企業データ

社 名：五洋建設株式会社
事業内容：建設工事の設計および請負／コンサルタントおよび測量業／地域・都市開発および海洋開発業／不動産業／環境整備・公害防止業／鋼橋および鋼構造物製作・架設業／砂利・土砂採取業／前各号に付帯または関連する一切の事業
設立：1950年4月（創業1896年4月）
所在地：東京都文京区後楽2-2-8
従業員数：連結3,888名、単体3,335名（2025年3月）
ホームページ：<https://www.penta-ocean.co.jp/>

